



岩手県 株式会社アキヤマ
「継続4年目となるいわての学び
希望基金への寄附」事業



株式会社アキヤマ
代表取締役会長
秋山昭明さん

選考理由

社会貢献活動審査委員会
委員
永井多恵子氏



東日本大震災は日本人として忘れてはならないと思う。特に親を失った子どもたちへの教育支援は生きて残された者たちの責任でもある。「いわての学び希望基金」は震災孤児・遺児を対象に、入学金・卒業一時金をはじめ、月額で小中学生には2万円、高校生には4万円、学生には6万円を援助していこうとするものです。岩手県遊協傘下のアキヤマは子どもたちに希望を与えようと、この「いわての学び希望基金」に平成23年から毎年100万円の継続的寄附を行ってきた。子どもたちが希望する学校で学ぶことが出来、未来を担って羽ばたいていくための大いなる助けであり、将来の東北を支える希望となることでしょう。

復興や次代を担っていく
地元の子どもたちを支援

震災孤児・遺児のための寄附を10年間継続

東日本大震災に伴う津波によって、4673名という多くの命が奪われた岩手県。さらに、いまだ1130名が行方不明のままである(2015年1月9日現在、警察庁)。この被災によって、岩手県では親を失った子どもたちがたくさんいる。県の調べによると、両親を失った震災孤児は94名、片親を失った震災遺児は489名にのぼる(2014年6月30日現在、18歳未満のみ)。また、親が無事であっても、被災によって仕事を失った人も多く、その子どもたちは厳しい経済状況下に置かれているのが現状である。

そうした子どもたちが、自らの希望に沿った学校を卒業し、社会人として独り立ちするまで、息の長い支援を行うことを目的に、県では2011年6月に「いわての学び希望基金」を設置し、全国から善意の寄附を募るとともに、震災孤児・遺児に対して、未就学児・小中学生月額2万円、高校生4万円、学生6万円を給付している。また、一時金(奨学金)として小学校入学時に6万円、同卒業時に9万円、中学校卒業時に13万5000円、高校卒業時に30万円を給付している。

岩手県一戸町に本社を置き、県北部と隣県の青森県にホールを展開する株式会社アキヤマでは、同基金の趣旨に賛同し、岩手の東日本大震災からの復興には将来を担う子どもたちを支援することが重要であると考え、2011年から毎年、100万円を同基金に対して寄附している。アキヤマでは、この寄附を10年間にわたって継続していくことを決めており、厳しい状況に置かれた岩手県の子どもたちが今後、生活や勉強を続けるための一部に役立ててほしいと願っている。

創立40周年で地元小中学校に教育資金を寄附

アキヤマは、「仕事を通じて社会に貢献します」を経営理念に掲げ、地域社会とともに歩む企業、地域住民から評価・理解される企業であり続けたいとの思いで、日々の業務に取り組んでいる。



陸前高田市での炊き出し



岩手県二戸市に教育資金を寄贈

「地域の方々からのご支援やご愛顧に感謝するとともに、地域の方々のお役に立ちたい」という観点から、アキヤマでは創業40周年を迎えた昨年、将来を担う地元の小中学生の教育に役立ててほしいと、ホールのある岩手県一戸町、同葛巻町、同二戸市、青森県三戸町の小学校、中学校に、各100万円ずつ、計800万円を教育資金として寄附した。

こうした寄附は、将来を担う子どもたちにとって学校教育が極めて重要であり、子どもたちが健全に成長し、これからの地域社会に役立つ人間に育ててほしいという願いからなされたものである。寄附を受けた自治体からは、「次代を担う子どもたちのために、大切に使いたい」といった言葉が返されている。一戸町や葛巻町の町役場で行われた贈呈式の模様は、地元の岩手日報などで写真入りで報道された。

また、アキヤマでは、2016年に岩手県で46年ぶりに開催される第71回国民体育大会「希望郷いわて国体」の会場整備費として、一戸町に130万円、二戸市に100万円の計230万円を寄附している。

「いわての学び希望基金」への寄附に先立ち、アキヤマでは大震災直後の4月から5月にかけて、一戸町商工会の会員とともに大槌町、山田町、野田村、陸前高田市で計6

回、ごはんと豚汁の炊き出しを行っている。このときは社員総勢50名で、被災地の避難所に千人鍋(一度に1200名分の豚汁を作ることができる)を持参し、ごはんも豚汁の提供を行った。

このほかにも、3月には釜石市の避難所に布団、毛布、医薬品、冷蔵庫、洗濯機、食料品、飲料品などの支援物資を届ける姿は、地元住民や関係機関から関心を寄せられるとともに、すばらしい活動だとの高い評価を得ている。



千人鍋を持参して行った大槌町での炊き出し